美術館で日々起きているあれやこれやをお届けする「高知県立美術館通信 ケンビレター」

KENBI LETTER

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

no.124

COLLECTION

巨匠シャガールの出発点！謎めいたモチーフにも注目

マルク・シャガール《村の祭り》

1908年／カンヴァスに油彩／68.0×95.0cm／高知県立美術館蔵

©ADAGP, Paris&JASPAR, Tokyo, 2026　C5403

《村の祭り》は当館が所蔵するシャガールの5点の油彩画のうち最初期の作品で、シャガールがパリに出る前の貴重な作例である。シャガールは1907年まで帝政ロシアにある故郷ヴィテブスク（現・ベラルーシ共和国）で過ごした。その後、首都ペトログラード（現・サンクトペテルブルク）にある帝立美術学校に入学、翌年には自由な校風のスヴァンツェヴァ美術学校で指導を受けた。首都では美術館に通ったり、劇場に足を運んだりと過去と同時代の芸術を吸収する。同年夏、故郷に帰ったシャガールは初期の代表作《死者》（ポンピドゥーセンター所蔵）など死をテーマとする作品群を制作した。本作もその一点で、2024年、オーストリアの首都ウィーンにあるアルベルティーナ美術館で行われた展覧会「CHAGALL」に出品された際には、家族や友人、日常を描いた作品のひとつとして《死者》の隣に展示された。

本作の原題「ケルメス」とは移動遊園地などが設置される縁日のようなお祭りを指す。描かれているのは画面中央に柩を担ぐ人とそれに続く葬列、手前に横たわるランプをもった道化師、その足元に近づいてくる黒猫、画面の奥には、左から鉄棒をする軽業師、旗のある建物から葬列にバケツで水をかける人、メリーゴーラウンド、カサを持ってたたずむ人物、と悲劇的な要素と祝祭的な要素が混然一体となった謎めいた世界である。その後の作品でも繰り返し描かれる「生と死」、相反するものを並列で描き出す手法を見てとれる。

1911年、シャガールは当時の芸術の中心地フランス・パリへ行き、最新の芸術に触れながら独自の作風を確立させていく。豊饒な色彩の世界を確立する巨匠の出発点となる作品である。　文・柳澤宏美（当館学芸員）

INTERVIEW

赤ちゃん連れもウェルカム♪♪

担当者に聞く「ベビーフレンドリーアワー」企画立案について

当館では、お子さま連れのお客さまが気兼ねなく、安心して鑑賞できるよう配慮した時間「ベビーフレンドリーアワー」を実施しています。担当者に立案の意図を語ってもらいました。

語り手・茂木恵美子（当館主任学芸員）

立案者の茂木学芸員

――ベビーフレンドリーアワーとは、どのような時間ですか？

2024年の「生誕200年 河田小龍」展より開始しました。主に0～2歳の保護者さまを対象に事前予約制で、展覧会を自由に鑑賞いただいています。実施中には館内の掲示等で赤ちゃん連れのお客さまが来館していることを周知して理解を促し、15分程のギャラリートークには、赤ちゃんも一般のお客さまも一緒にご参加いただき、解説中に赤ちゃんボイスが響くなど、終始和やかな空気が流れています。

――企画に込めた思いを聞かせてください

美術館は誰にでも楽しめる場所です。ベビーカーの貸出や授乳室等の設備面は充実しているので、お客さまが幼子を連れて行くことへの心理的ハードルを少しでも下げ、美術館は親子でゆっくり過ごせる場所だともっと知ってほしいと思いました。

――今後どのようなプログラムにしていきたいですか？

開催するごとに徐々にリピーターの方も現れ企画が根付いてきたかなと思います。子どもとのお出かけ先に美術館が選ばれるよう、これからも定期開催を続けていきたいと思いつつ本企画がなくとも、いつでも小さいお客さまがいる、そんな美術館になるのが理想です。

――小さなお子さんのいる親御さんに向けてメッセージをどうぞ！

美術館に子どもを連れて行ってあげたいな、と思ってくださるだけでとても嬉しいです。でも子どもは気まぐれ。思い通りに作品を見てくれなかったり、プログラムに参加してくれなかったり、残念に感じることもあると思います。そんな時は、怒ったり注意したりするのではなくこの子ないに美術館を楽しんでいるんだ、とおおらかに過ごしてほしいです。

そんな茂木学芸員の思いは、夏の企画展「安野先生のふしぎな学校」展でも発揮されました。中面もチェック！

Exhibition Report 1

津和野町立安野光雅美術館コレクション

安野先生のふしぎな学校

2025年7月12日（土）－9月7日（日）｜当館展示室B・C

クイズを解きながら作品を鑑賞できる「こどもガイドブック」

画家・安野光雅さんの絵本原画を中心に、幅広い分野の作品を紹介する本展には、幅広い年齢層のお客さまにご来場いただきました。担当した筆者は育児休業を経て久しぶりの企画展。子育てを通じ絵本に絶賛沼ハマ中、安野光雅さんの故郷・津和野町も訪れ、安野ワールドに思いを馳せつつ準備しました。心がけたのは小さなお客さまも排除しない空間づくり。作品を普段より低めに展示したり、絵本を読んだり休憩できるスペースを設けたり。ギャラリートークではなるべく難しい言葉を避け、ベビーフレンドリーアワーや託児サービス、絵本の読み聞かせを開催したり…こんな配慮があれば子どもを連れてきやすいな、という思いを実現しつつ、普段の生活が仕事に活きるとはこのことだなと実感しました。

文・茂木恵美子（当館主任学芸員）

親子で楽しめるイベントも充実！

ベビーフレンドリーアワーでのギャラリートーク

絵本読み聞かせは大人にも大好評でした

Project in Progress

高知サマープロジェクト「マテリアル・ミュージアム」

2020 ⟶ 2025 ⟶

高知サマープロジェクトは、展覧会や舞台公演以外の美術館の第3の活動として、1階展示室Dで展開する夏休みの特別企画です。その2回目として行った「マテリアル・ミュージアムー高知でみつけたステキな廃材」（2020年）を皮切りに、マテリアル・ミュージアムを継続するプロジェクトとして行っています。地域で生み出される廃材や端材を新たな資源として見直し、創造力によって生まれ変わらせる活動「クリエイティブリユース」のエキスパート、大月ヒロ子さんにご協力いただきながらカルチャーサポーターとともに取り組んでいます。

1 プロジェクトのはじまり

「マテリアル・ミュージアムー高知でみつけたステキな廃材」会場風景

「美術館で廃材？！」と不思議に思う人がいるかもしれませんが実は意外と相性が良いのです。本プロジェクトは、県内の事業所や商店街、アーティストのアトリエを訪ね、廃材を提供していただくことから始まり、収集した廃材を色や形、素材ごとに分類しました。解体した機器の中から現れるポップな色彩の端子や愛らしい形のパーツには目を見張るものがあります。当初の役割から離れて一つのマテリアルとして「よくみる」と、新たな発見や可能性を見出すことができます。「収集」「保存」「展示」という美術館の機能や、「よくみる」という美術鑑賞にも通じ、マテリアルを「よくみる」体験から美術館や美術を楽しむことにつなげたい、という思いがありました。

2 コロナ禍乗り越え、第2弾を実現

「マテリアル・ミュージアムⅡーくふうようふく」 会場風景

2020年のコロナ禍にスタートしたマテリアル・ミュージアムは、館内外でのコミュニケーションが限られ、積み残したこともありました。そのリベンジとして、古着を用いて自由な発想で新しい服を作る「マテリアル・ミュージアムⅡーくふうようふく きったり・ぬったり・つないだり」（2025年7月12日－9月15日）を行いました。古着とはいえ洋服にハサミを入れることへの戸惑い、ミシンや針仕事にハードルを感じる人は少なくないようでした。スタッフや会場に居合わせた皆さんのサポートで、完成した新作を着てにこやかに記念撮影に応じる参加者の姿にホッとしました。

3 プロジェクトの「これから」

参加者から提供してもらった写真で作った「Hi! Zai Card」と制作中のすごろく

現在、マテリアル・ミュージアムは館内プログラムやアウトリーチ・ツールとしての活用に向けて整備中です。多くの皆さんにマテリアル・ミュージアムに興味を持っていただき、活用のご提案等もいただければ嬉しいです。

文・長山美穂（当館主任学芸員）

Exhibition Report 2

特別展示・調査報告

再考《少女と白鳥》

贋作を持つ美術館で贋作について考える

当時の担当者が語る贋作のこれまでと今後

2025年9月13日（土）－25日（木）／10月4日（土）－10月19日（日）｜当館展示室A

展示風景

2024年6月、当館所蔵のハインリヒ・カンペンドンクの作品《少女と白鳥》に贋作の疑いが持ち上がりました。この作品は1996年に購入したものです。わが国における作家の最良の作品のひとつとして、長年にわたり親しまれてきました。

2010年から翌年にかけ、欧米の美術界を震撼させた大掛かりな贋作事件が発覚し、首謀者のヴォルフガング・ベルトラッキが逮捕されました。その際、彼が制作した作品のリストも公開されたのですが、その中に当館の作品らしきものが含まれていました。これに気がつかないまま、当館では10年以上、作品を本物と信じて公開し続けていたのです。

状況を察知したドイツ・ベルリン州警察からも情報提供の申し出があり、当館では保存修復の専門家の京都大学の田口かおり准教授に依頼して科学的分析を進め、2025年3月、ベルトラッキによる贋作と断定するに至りました。同年9月から10月にかけ、当館では事件の経緯や科学調査の結果などを紹介する展覧会「再考《少女と白鳥》」を開催しました。またギャラリートークやシンポジウムなどで様々な角度から贋作問題を検証し、多くの議論を呼んだことは記憶に新しいと思います。

シンポジウムも大盛況

現在、高知県は作品を納入した画商と「返還交渉」を行っていますが、着地点の目処は立っていません。先のシンポジウムでは、何らかのかたちで当館が作品を所蔵していくべきではないかという意見も出ています。皆様にはご心配、ご迷惑をおかけしておりますが、結果の発表まで、今しばらくお待ちいただきますようお願い申し上げます。　文・奥野克仁（当館学芸課長）

Exhibition Report 3

異端の奇才 ビアズリー展

旅先で出会ったビアズリーにまつわる数々、！

2025年11月1日（土）－2026年1月18日（日）｜当館展示室B・C

V&Aの展示室風景

V&Aでビアズリー作品を閲覧

ビアズリーが住んだ家（ロンドン）

19世紀末イギリスで活躍した画家オーブリー・ビアズリー（1872-98）。イギリス美術は文学とのかかわりが深く、挿絵や物語を題材にした作品は数多くありますが、なかでもビアズリーがO・ワイルドの戯曲『サロメ』のために描いた挿絵は特に有名でしょう。本展はヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（V&A）の所蔵品を中心にビアズリーの初期から晩年までの作品を同時代の家具や食器といった調度品とともに紹介する、まさに決定版の展覧会でした。昨年夏、イギリスに行く機会を得た筆者は、V&Aでビアズリー作品の閲覧をしたり、ビアズリーやワイルドが住んだ家などのゆかりの地をめぐったりしました。大英博物館そばの古本屋で『アーサー王の死』第三版（ビアズリーの死後に発行されたもの）を手に取れたのも、なかなかできない経験でした（円安でなかったら買ったのですが…）。

高知ならではのコラボレーションも大盛り上がり！

ビアズリーを愛する漫画家・楠本まきとのコラボしおりはSNSでも話題に

山六郎のイラスト（コレクション展で展示）

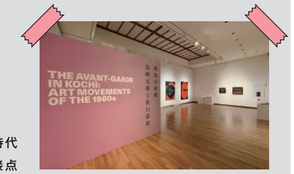
ビアズリーは20世紀初頭に日本に紹介され、日本の画家に影響を与えます。そのなかには高知出身の画家・山六郎もいました。1920年代に発行された雑誌『女性』に掲載するために描いた扉絵やカット絵は、流れるような線と繊細な点描、白と黒のデザイン性がビアズリーを彷彿とさせます。

今回、「ビアズリー展」と併せて「コレクション・アラカルト③」で山六郎の特集展示を行い、たくさんの人に見てもらうことができました。さて、ビアズリーの描く、美しい線と繊細な描写の系譜は現代の漫画までつながります。展覧会では漫画家・楠本まきとのコラボも実現しました。ビアズリーの写真をイラストにし、唐草模様を組み合わせたしおり。展覧会の記念品として使っていただければ幸いです。　文・柳澤宏美（当館学芸員）

館長寄稿

日々のつぶやき

1960年代生まれが1960年代を想う



「高知の前衛」展 会場風景

『高知の前衛　高﨑元尚と浜口富治』展は、1960年代の高知で起きた前衛美術運動の姿を再検証する企画であったが、ご覧いただけたであろうか。1963年生まれの自分は、いろいろな意味で熱かった1960年代という時代を―その空気を吸っていたのは確かだが―体感としては知らない世代である。

そんな子供時代の記憶の中でもかなり鮮明に覚えているのは1970年の《EXPO' 70》ごと一回目の大阪万博である。当時は大阪市内に住んでいたから、親に連れられて複数回足を運んだものであった。その目玉の一つとして、アメリカ館とソ連館が競うように《月の石》や月面探査宇宙船の実物を展示しており、それはいわば冷戦構造の間接的表出でもあったのだが、冷戦もベトナム戦争も学園紛争もまだ十分に理解できていなかった子供には、万博全体を覆っていた科学と技術への楽観的な信頼と期待の象徴ぐらいにしか見えなかったのだった。それでも一見華やかな大阪万博に一瞬、世の中の《闇》を感じたのは―ご記憶だろうか―あの「太陽の塔」の頂上、眼球の部分に籠城してアジテーションを行い、さんざん報道された《目玉男事件》であった。今では「太陽の塔」も国の重要文化財に指定され、否が応でも時の流れを感じないわけにはいかない。

それはともかく、やがて成長して1960年代を知識として知るわけだが、日本美術においても1960年代は熱い時代であった。第二次世界大戦後、1950年代に日本は欧米の同時代美術と再び接点を持ち、戦後大きく変貌する欧米の前衛表現は日本の美術界に衝撃と影響を与えた。その結果、1950年代から60年代にかけ、以前とは大きく異なる日本の前衛美術運動が活発化し、それは東京だけにとどまらなかった。

地域の前衛美術運動は西日本の各地で起こり、大阪の「具体美術協会」や福岡の「九州派」が代表的である。『高知の前衛　高﨑元尚と浜口富治』で取り上げた前衛土佐派も、そうした時代の熱気の中で生まれたものであった。「具体美術協会」については兵庫県立美術館や芦屋市立美術博物館、大阪中之島美術館が積極的に収集・展示しているから関西でも目にする機会が多いが、この春、戦後日本の前衛美術をそれぞれの視点で検証する企画展が関西の美術館で続けて開催されるので紹介しておきたい。

京都市京セラ美術館の『日本画アヴァンギャルド KYOTO 1948-1970』展（2/7～5/6）は、バンリアル美術協会など京都における前衛日本画の動きを振り返る。また、女性美術家という角度からこの時代を再構築する『アンチ・アクション　彼女たち、それぞれの応答と挑戦』展が、愛知・東京会場を経て兵庫県立美術館に巡回する（3/25～5/6）。機会があればあわせてご覧いただきたいところである。　文・安田篤生（当館館長）

美術館のなかのひと　第6回

久保徹（くぼ とおる） 副館長 総務課長、企画事業課長兼務

美術館ではどんな人が働いているの？職員やそのお仕事を不定期で紹介します。

Q どんなお仕事をしていますか？

施設の維持管理や修繕、県との連携調整など、美術館の事業を裏から支える仕事をしています。

Q 仕事で印象的だった出来事は？

昨年4月から美術館に勤務していますが、その前までは40年間カレンダー通りに通勤していたので、休みの曜日が定まっていないシフト勤務にはなかなか慣れません。ゴミ出しの日を間違えそうになったり(笑)家族は土日休みなので、土日出勤の前日は「明日は仕事！」と気合いを入れています。

Q 美術館のここがオススメ！

建物が美術館建築として新鮮。近代的な陸屋根ではなく日本家屋の屋根を採用していて、いかにも日本的で良いなぁと思っています。また学芸員、ホール事業の担当者の皆さんがそれぞれに「自分が良い作品を紹介したい」という思いを持っているのを感じます。その熱心な思いが県民の皆さんにも伝わって、展示や公演を見に来てもらえるといいなと思います。

聞き手・中谷有里（当館主任学芸員）

美術館の屋根

KENBI LETTER
no.124
〒781-8123 高知県高知市高須353-2　Tel. 088-866-8000　Fax. 088-866-8008　moak.jp
編集：中谷有里（当館主任学芸員）　デザイン：阿部航太　発行：高知県立美術館（公益財団法人高知県文化財団）
発行日：2026（令和8）年3月31日

ミシェル・アンヌ・ドゥ・メイ×ジャコ・ヴァン・ドルマル監督×アストラガル

『コールド・ブラッド』

日本初演・高知のみ

8年前、台風上陸により2日目の幕は下りたまま、一夜限りの〝幻〟となった2017年招聘『キス&クライ』日本初演。指先によるダンスが主役を演じる恋物語が、ミニチュアの舞台美術とともに舞台上で演じられ、その場で撮影され、無編集のまま即座に巨大スクリーンに上映される――劇場空間でのみ出現する〝儚い映画〟の観劇体験は大きな反響を呼び、再演を望む声が絶えませんでした。

昨年10月、その系譜を継ぐ姉妹作『コールド・ブラッド』の日本初演が、再び高知でのみ実現。今回は「7つの死」を主題に、振付家・ダンサーのミシェル・アンヌ・ドゥ・メイら、ベルギーの映画と舞台芸術のプロフェッショナルたちが、手指とオブジェの小さな世界から驚くほど精緻な映像美をライブで立ち上げました。

COLD BLOOD ©Julien Lambert

2025年10月4日（土）・5日（日）美術館ホール

本作の日本語版上演に向け、前作に続きリリー・フランキーさんをお迎えした声の収録。オンライン越しのドルマル監督の演出による全観客の父親のように温かい声で「この言葉どおり、人生の最期を肯定するような温もりのある語りが作品を包み込みました。ベルギー流のユーモアや間合いが息づくよう、日本語の機微へ丁寧に編み直された柏木しょうこさんの翻訳台本を、『読み進めるのが楽しかった』と振り返るリリーさんに、監督も大きく頷くほどリリカルな言葉の妙は、再タッグのなせる業でした。今回、監督の来日は叶いませんでしたが、帯屋町の映画館（キネマM）の協力で『トト・ザ・ヒーロー』『神様メール』の特集上映が組まれ、舞台とスクリーンの両側から作品世界に触れられたことも好評でした。

そして今だからこそ明かせる、初日前日の機材トラブル……。高知の劇場・映像関係者、地元テレビ局にまでスタッフ総出で問い合わせた末、地方では稀有な部品を求めて市内でお持ちの方とつながり、ぎりぎりのところで幕を上げることができました。「二度も高知に来られたことも奇跡だけど、これこそ奇跡！」と語った撮影監督と、来場者アンケートにあった「長い長い想いが今日報われた」という8年越しの言葉を、きっと忘れないと思います。この場を借りて、関わってくださったすべての方に感謝いたします。

文・松本千鶴（企画事業課主幹）

ベルギーとオムニバス・ジャパンを繋げて日本語版ナレーションを収録。素敵な音色に仕上がりました。（左から：石上槙大さん、江口研一さん、ドルマル監督（画面）、リリー・フランキーさん、柏木しょうこさん、ZAKさん）

幻の公演のタッグ　念願の高知再来！

スクリーン裏でパシャリ！このメンバーでお届けしました。

美しきコラボレーションにうっとり

秋の定期上映会／企画展　「異端の奇才 ピアズリー展」関連企画

異才たちの宴　ポーと乱歩とビアズリー

企画展にあわせた映画上映会を実施しました。ラインナップはビアズリーが作品を描いたエドガー・アラン・ポー原作『アッシャー家の末裔』『黒猫』『モルグ街の殺人』、そしてビアズリーの作品が登場する江戸川乱歩原作『黒蜥蜴』。『アッシャー家の末裔』は1928年製作の無声映画で、この作品が無声映画初体験の方も多かったようです。音がないからこその感情豊かな演技や、工夫が凝らされた映像表現に「無声映画の面白さを知った」「CGでは表現できない映像美」などの感想が寄せられました。『黒猫』『モルグ街の殺人』は、原作とかけ離れたストーリーはさておき、ハリウッド黎明期を代表する二大怪奇俳優、ボリス・カーロフとベラ・ルゴシの怪演っぷりや顔面対決を楽しんでいただけたようです。そして、丸山（美輪）明宏主演『黒蜥蜴』（1968年公開）。大きなスクリーンにうつる美輪様の妖艶な美しさに、みなさまうっとり……♡ 戯曲を担当した三島紀夫の出演シーンでは、彫刻のような肉体美に目が釘付けでした。「サロメ」をはじめビアズリーの作品が大きく引き伸ばされ様々なシーンに登場し、出展されていた実物とのサイズの差に驚いた方も多かったのでは。まさか作品の制作から70年以上経って日本の映画に登場しているとは、ビアズリーも想像しなかったでしょう。上映の他にも、関連資料の展示や、展覧会担当の柳澤学芸員によるミニトークを開催。展覧会とあわせて鑑賞下さった方多く、様々な角度からビアズリーに触れていただけた2日間となりました。　文・泰栄学芸員（企画事業課）

数き詰められた美輪様のブロマイド（当館星加コレクションより）

柳澤学芸員によるミニトーク

2025年11月15日（土）・16日（日）　美術館ホール

ダンス作品兼演劇作品

『ダンスの審査員のダンス』

ダンサー、俳優、音楽家が一堂に会した本作は、ダンスとも演劇とも異なる、新鮮な舞台体験をお届けしました。身体、言葉、音楽が交差する舞台は、これまでのジャンル分けでは捉えきれない時間でした。

舞台上では、「踊る行為の中心にあるのは〝私〟か〝ダンス〟そのものか」「振付を生み出す主体は何か」といった問いが、次々と立ち上がります。出演者の身体やリリック（台詞）を通して、観客はその問いに向き合い、考え続けることになります。明確な答えが示されないからこそ、感じ方や解釈がとめどなく広がっていく、濃密な50分間でした。

さらに本作は、ダンスという表現をきっかけに、「私たちは日常の中で、どのように他者や物と関わっているのか」といった、身近でありながら奥深いテーマへと観客の思考を導いていきます。アンケートには、舞台の出来事を自分自身の生活や人間関係に重ね合わせて受け止めた、という感想も寄せられました。

初日の公演終了後には、出演者の酒井はなさん、小林うてなさんを迎え、ポストパフォーマンストークを実施しました。ダンスと音楽、それぞれの専門領域をもつお二人が、本作にどのように向き合い、創作の過程で何を感じ、どのように取り組んだか、率直な言葉で語ってくださいました。

ご来場くださった皆様、そして本公演を支えてくださったすべての関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。　文・福島尚子（企画事業課チーフ）

アフタートークの様子（左から：筆者、酒井はなさん、小林うてなさん）

2025年12月13日（土）・14日（日）　美術館ホール
ダンスワークショップ　11月3日（月・祝）　演劇ワークショップ　11月22日（土）

思索しながら鑑賞する

HATORI Naoshi 提供：愛知県芸術劇場